(2) 施設での『 お別れ 』

施設長　福田 雅文

むつみの家で暮らす利用者の方は、年に数人の方が旅立たれる。重い障がいや合併症と闘いながら日々を精一杯頑張って生きている方たちは、肺炎などの感染症でも重症化して旅立たれることもある。一方、近年の医療の進歩で長生きされ還暦を迎える方も増えてきたので、悪性腫瘍を合併される方も増えて、ご家族と一緒に緩和ケアを行いながらの看取りの医療を行うこともある。また、基礎疾患などがあるために、なんの前触れもなく突然死で旅立つ方もおられる。みな人生の終わりがいつ訪れるかはなかなか予測できない。だからこそ、入所の方が一日一日を自分らしく充実して生きて行けるように支援することが大事だと思う。

施設では利用者の方が亡くなったときには、ご家族の希望をお聞きして「お別れ会」を行うことが多い。亡くなった方が信者の方であれば、神父様にお願いして追悼のミサを行うこともある。私たちの施設はシスターたちが創立した修道女会が母体なので、施設はいつもマリア様とイエス様に見守られている。

お別れ会には亡くなった方の同じ病棟の利用者や職員に加えて、これまで馴染みのあった他の病棟の利用者や職員も参加する。多いときはホールいっぱいに集まることもある。お別れ会ではご家族と旅立つ方のこれまでの人生を語り合い、シスターたちや参列者と聖歌をうたい、みんなでお祈りを捧げる。施設では利用者の方と職員が苦楽を共にして、いつも心を通わせ支え合って暮らしてきたので、みな良き友人や家族のような関係で、別れはとても辛く淋しい。最後は正面玄関で多くの利用者と職員に見送られての別れとなる。

初めて、むつみの家のお別れ会に参加したときのことは、よく記憶している。多くの利用者の方は言葉によるコミュニケーションが難しいために、亡くなった方を前にして、どのように感じ、その感情をどのように表現されるのかは想像もできなかった。職員は利用者の方たちを一人ひとり車椅子で棺の傍に連れていき、棺のなかに一緒に花を添えていく。利用者の方はきっと感情はあまり出されないのではと想像していたが、初めて見せてくれた利用者一人ひとりの感情表現は私にとって衝撃的だった。しっかりとその方の顔をみつめ、とても悲しい涙を溢れさせながらそっと手を合わせる方、体は麻痺や不随意運動でどうにもならなくても、悲しい表情を浮かべている方、抑えきれない悲しい感情を泣き叫ぶ声で表現し、ホールが悲しみの声に包まれ、参列者の涙を誘うこともある。一人ひとりそれぞれのやり方で、自然に、自分の気持ちを素直に表現されている。その悲しみの表情から、彼らが如何に純粋な心を持っておられるかを理解でき、改めてこの方たちがとても大切な存在

であると感じた。

一緒に暮らした仲間たちの涙は参列したご家族にとっても癒しの涙になっているように思う。ご家族は初めて見る重い障がいのある方の純粋な悲しみの祈りと職員の流す涙に触れて、旅立ったこの子は一人ではなく素晴らしい仲間たちと共に暮らしていたことを知り、安堵されているように思う。

これまで多くの一般の葬儀には参列してきたが、ここでのお別れ会は特別だった。重い障がいのある方たちが心の悲しみを素直に表現されている姿に私は感動した。こんな送られ方はなんと素敵なんだろうと思った。どうすることも出来ない重い障がいと必死で向き合い生き抜いてきて、やっと重い障がいから解放され、穏やかに微笑みを浮かべられた表情に「本当にお疲れ様でした。よく頑張ったね。」と合掌する。心豊かな人間関係が破綻した今の日本社会では自殺や殺人、虐待死などが急増している。また、誰にも気づかれずにひっそりと孤独な死を迎える方も多くなっているなかで、このように心を通わせた多くの仲間たちに囲まれて旅立つことが出来るのは、本当に素晴らしいことだと思う。近年、コロナ感染予防のためにお別れ会は控えていたが、利用者の方、ご家族そして職員にとっても大切な会なので、大事にしていきたい。